

食料生産と社会構造

—— 人間にとって食料とは何か (1) ——

末原 達郎

Tatsuro SUEHARA : Food Production, Consumption and Social Structure:
Anthropology of Food (1)

In this paper, the author proposes a new study area, called ‘anthropology of food’, which deals with matters of food, such as production, consumption, distribution, food preference, and its social structure in the world.

This area includes the study of socio-economical food structures of human groups in the world and in human history. Discussion ranging from the great transformation of social structures that took place during the Agricultural Revolution (or Neolithic Revolution) in the Neolithic age to Economical Liberalization in the 21st century falls under this study area.

In the present day Equatorial Africa, some human groups are hunters and gatherers, and other groups are slash and burn agriculturalists. They live in the same ecological environment, but both groups have very different social structures, especially in the ways that they acquire food, its consumption and distribution.

The author describes one of the typical slash and burn agriculturalist groups, the Tembo, and their food production, distribution, and consumption system, and their social structure. The Tembo are relatively independent from the world market economy. They produce their food-stuff by themselves and sell their agricultural products at outdoor markets held on a fixed day and in fixed places. These kinds of societies, which the author terms ‘articulated societies’, are not organized by the market economy in their community but articulated with the market economy.

Another, slash and burn agriculturalist group, the Fung, described by Sakanashi produces cacao. The Fung’s economy is more integrated in world market than the Tembo’s. All of their cacao beans are sold outside of the community and they use money in everyday life in the village. These kinds of societies, which the author terms ‘integrated societies’, are well organized with the market economy. However, even in the ‘integrated societies’, we find some social networks that work on different principles than that of a market economy.

1. はじめに

学問は、学問として成立開始後、時間がたつにしたがって、研究を細分化し、内容を狭く限定し、より精緻化させていく傾向がある。農学の場合もその例外ではない。農学は、農業生産や農業経営と結びつくことによって体系化し、発達してきた。特に日本においては、第二次世界大戦後から生産者のための農学の視点が強く押し出されてきた。しかし、現在は、農学自体が新たな転換点を迎えてつあると考える。

ひとつには、農学そのものが生産だけではなく消費の視点をもたざるを得ないようになって

てきた点である。これは、農産物の生産から流通を経て、消費にいたるまでを一貫した連続体としてとらえる視点、フードチェーン（もしくはフードシステム）の視点をもつことが必要になってきたからであるが、それだけに限らない。

食物というものが多様な意味をもち、人間と社会、人間と自然、人間と人間を結びつける重要な要素になっていることが、より明らかになってきたからである。また、農業は、お金を稼ぎ出す手段としてだけではなく、人間の身体そのものを構成し、直接的に維持していく食物をつくり出すという役割を担うことも重視されるようになってきたからである。

本論では、農学という学問体系をさらに一步踏みだして、食学もしくは食料人類学という研究範疇を想定し、人間にとって食料とは何かについて、よりインターディシプリナリーな研究分野を構築したいと思う。それは、農業とは何か、農学とは何かを考える場合に、さらに基本となる学問的な問いかけを提供することができると思うからである。

現在の学問領域では、食料の研究は様々な分野から行なわれている。筆者の直接関係する農学をはじめ、自然環境と人間との関わりや人類の進化の側面から考察する人類学、食料の果たす身体的役割や食料不足の影響を研究する栄養学、歴史的役割や歴史的変化を研究する考古学、歴史学、社会的役割や文化的意味を考察する文化人類学、哲学、社会学、食料の流通や分配、国家間の移動を考察する経済学、国際政治学などである。これらの研究は、それぞれの分野の方法論を通じて分析されてきているが、実は内容に関してみると、相互に密接に結びついている。

また、実際に食料が移動したり、送られたり、奪われたり、交換される場合には、食料の果たす役割や意味は、相互に深く関連しあって登場してくる。たとえば、気候変動や政治的変動によって極端な食料不足や飢餓に直面する地域が出てきたとしよう。いったい、どこに、どのような食料を、だれが、どのようにして送るかが、喫緊の課題となる。キャッサバやヤマイモ等のイモを主食として食べてきた人々のところに、米やトウモロコシを援助物資として送るとすると、その地域の人々の生活や文化に、それはいったいどういう影響をもたらすのであろうか。あるいは、トウモロコシを主食として食べてきた人々であったとしても、一般の食料用のトウモロコシではなく、飼料用のトウモロコシ（品種も味も異なる）を援助物資として送ったとすると、それはいったい何を意味するのか。魚を食べない人や肉を食べない人のところに、タンパク質が足りないからといって、それぞれ魚や肉を送ったとしても、それは人間の尊厳にかかわる重要な課題を相手の価値観を無視して押しつけることになる。これらのことは、食料危機に際しては、具体的に直接的に発生してくる問題である。また、いつまで、どのように食料援助を続けるか、どの時点まで食料援助を行ない、どの時点から自立的食料生産にまかせるかといった点も、同様に重要な問題群となってたち現れてくる。このような問題を直接研究できる分野が、新たに必要になってきたと考える。このような研究分野は、ヨーロッパでは食料人類学として、一部はすでに研究されてきている¹⁾。

2. 人類の進化の中での食料と農業

人類学の研究（特に自然人類学と人類進化論）においては、人類が進化してきた過程を明らかにしてきたが、その過程における人間と食料の関係も明らかになってきた。その結果、人間は、その人類史上の大部分の時代において、食べるものを、自然界から直接手に入れてきたことが明らかになっている。狩猟や採集という行動こそが、人間の行なってきた基本的な経済活動となる。現在でも、水産物の大部分は自然界にある魚や貝や海藻を直接獲得することから成り立っている。しかし、植物と動物に関しては、かつては狩猟と採集から獲得されていたが、ある時期から現在に至るまで、農業や牧畜によって獲得されてきている。いわば、広い意味での農業（牧畜や畜産を含む）とは、こうした狩猟や採集によって自然界から得られる動植物を、人間自身の手によって、計画的に生産し、計画的に獲得する手段であったのだと言える。

実は、この点が他の動物とは異なり、自然界に対して人間が独自のあり方を歩み出してきた第一歩だと考えられることになる。これは農学の立場から見ればということになるが、人間が農業を生み出し、畜産を生み出したことによって、人間は他の動物とは異なる「人間らしい」生き方を開始したのだ、と考えることができる。それは、自然界のすべての動物の中で、人間だけが意識的に自然を変え、人間の都合のいいように自然を計画的に利用するようになったことを意味する。人間を中心に世界を見る見方、いわゆるヒューマニズムの成立してくる根源は、ここにある。このことは、人間が自然の中で一方的に受身の形で存在することから、自然を改変することが可能な存在へと変わることになったことに繋がる。いわば、この時を機に、人間は自然界の世界に埋没する存在ではなくなり、離陸したのではないか、という考え方である。「農業革命」(Agricultural Revolution)、もしくは「新石器革命」(Neolithic Revolution) という概念があるが、これは人間社会の独自性とその起源を、直接説明した概念としてとらえることができる。

しかし、実際には、「農業革命」とよばれる過程は急激に起こったことではないと、現在の農学では考えられている。農業革命は、産業革命に準じて革命という言葉が用いられているので、一気に短期間のうちに起こったように考えられるが、実は、何万年にもわたる人間と動物や植物とのインターアクションの結果、徐々に人間の側が技術を蓄積し、動・植物の側も性質を変えていき、長い時間をかけて農業や牧畜が形成されていったことが指摘され、明らかになってきているからである²⁾。

たしかに、農業は人間が開始した最大の技術の体系であり、それは他の動物にはみられない独特の特色であることはまちがいない。しかし、農業こそが人間を「人間たらしめている」というと、そうではない。なぜなら、農業を開始するはるか前に、人間は人間としての独自の道を歩み始めており、その時代の方がはるかに長いことが明らかになっているからである。

農業の開始は、人間に文明をもたらすことの端緒となったが、そのことは、人間が自分の作り出す技術に対する過信をも生み出してきた。実は人間は、現在でも、実体として自然の一部に含まれており、人間の身体もまた、自然の摂理を受け入れている。食物や水もまた、われわれの身体を維持していくためにどうしても必要であり、生物としての人間の側面を強く持っている。農業や畜産においても、同様のことがいえる。人間は人間の力だけで農業や畜産を完結することはない。農業においては、天候や降雨量や日光の量や温度などの自然そのものの力に、現在でも多くの点で強く依存している。牧畜や畜産は技術的に進歩が著しい分野である。しかし、どれほど人工的な技術が進歩したとしても、自然のもつ生産力、あるいは再生産力に依存することなしには存立しえないものである。

3. 人間の社会における食料生産の開始と自然認識

食料の問題は、農業の発生よりもはるか以前から存在してきた。人間は、その歴史の90パーセント以上を、自然界から食料を獲得することでその生命を繋ぎ、世代をついできた。人間は食料に対して、あるものは選好し、あるものは忌避し、分別し、弁別して食べてきた。また、食料を分かち合い、奪い取り、与えることによって、人間どうしの様々な社会的関係を確立してきた。おそらく、家族や友人といったものも、こうした食料をめぐるやり取りが基礎的な関係となって、徐々に形成されていったのではないかと推定できる。

農業と牧畜の成立は前述したように時間をかけて成立してきたものだが、いったん農業における生産と再生産のプロセスが確立されると、食料の分配や蓄積といったことにも、大きな変化を与えるようになった。

ひとつの大きな変化は、農業によって、獲得される食料の量が予想できるようになったことである。狩猟や採集においても、雨季や乾季などの季節によって、それぞれ獲得される動植物の種類や量が増減する傾向があることは予想されたであろうが、それが実際に自分たちの手に入るかどうかまで、保障する要素は何もなかったのである。しかし、作物として成長させることが可能になると、獲得される食料が量的に増加し、またその量が予想できるようになる。もちろん、気候の変動や降雨の量によって予想は常に裏切られる。それでも、採集や狩猟に頼っていただけの時と比べると、その獲得量は飛躍的に増え、かつ確実性が増す。その増加した食料をいかに分配するのが、人間の社会組織における基本的な変更を生み出していくことになる。

もうひとつは、自然の別名である土地や領域に対して、領有や占有という概念の萌芽が生み出されていくことである。自然そのものに依存して食料を確保していた狩猟採集生活に比べると、農業は自然への働きかけと投資を伴った行動である。たとえば、一袋分の小麦を翌年の生産と収穫のために種まきするためにとっておくということは、小麦そのものを直接食

べるという現在の利益を制限して、翌年のより豊かな利益を予測して我慢することであり、翌年実際に種まきをすることは、豊かな収穫を目的として新たな投資を行なうことに等しい。もっとも、種をまいたからといって、収穫が確実にあるわけではない。天候不順のため、あるいはさまざまな技術的な理由で、種子は成育しないかもしれないし、成育したとしても鳥や野生動物に食べられてしまう可能性も高い。それにもかかわらず、農業とは、これらさまざまな予測を行なった上で、さらに新たに畑を開き、種をまき、畑を管理し、作物を収穫し、収穫したものを保存して食料を確保するという、一連の作業である。それは将来を予測し、労働を行ない、さらに自然条件の変動に賭け、さらに翌年に向かって労働と種子の蓄積を繰り返していく。不確実であるが、それでも、狩猟採集に依存するよりは、食料を確保する確実性が高くなったからこそ、人間は狩猟採集から農業へと重点を移していったと考えられる。

収穫できる確実性を高くするために、自然環境から悪い影響を少なくし、さまざまな労働が行なわれることになる。最も重要な作業は、水を確保することである。天水に頼るとしても、できれば他の場所から植物が成育するための水を供給し補完することは、収穫の確実性を最ももたらす作業であった。西アジアの畑であれ、東アジアの水田であれ、自然界の一部を切り開き、水を十分に確保できる空間を整備し、そこに向けて何らかの水路を切り開くことは、農業を継続的に行なうことの基本となる。土地を自然のまま利用するのではなく、何らかの改変を行ない、畑や水田といった農業に適した状態するためには、そのために人間の労働力の投入が必要となる。自分たち自身や自分たちの家族の力で、この土地への労働力の投資が行なわれた場合には、その土地とそれを切り開いた本人や家族との間に、何らかの直接的な結びつきが生まれてくるようになる。長年にわたる労働力の投入は、この土地と土地に労働力を投入した人々との関係を強化する。農業の方法が焼畑農業から徐々に集約化され、常畑に近くなった場合や、灌漑をともなった水田のように、農作物を育てる場所が整備され、連続的に水が供給される必要がでてきた場合には、土地は単なる自然の一部ではなく、人間の労働力が投入され変化を受けた農業のための人工的な場所、すなわち農地としての性質をもつことになる。

いったん自然の土地が人工の土地へと変化すると、それをつくり出した人間は、その土地への占有的利用を主張するようになる。この結果、土地はだれもがアクセスできる自然から、特定の人間集団と強い結びつきをもった土地や農地へと変わる。ただし、まだこの土地は、私有されているとはいいがたい。土地に対するさまざまな関係者の権利が重層的に重なり合っており、それぞれの社会関係の強弱によって、土地への優先権はまだ変化する状態にある。移動式の焼畑農業の場合は、現代においてもこの傾向が強い。

一方、狩猟採集においても、特定の自然環境との結びつきは存在している。ある狩猟採集集団が、毎年同じ地域を移動していたとすると、その移動域の周辺は、その集団自身の成員はもちろんだが、他の集団からも、その集団の狩猟採集のテリトリーとして認められることになる。赤道アフリカの森林地帯の狩猟採集民の例では、これらのテリトリーが存在し、認

識されていることが報告されている³⁾。しかし、狩猟採集の場合は、テリトリーの領域そのものは、実際には互いに重なり合っている場合が多く、農耕地のように明確な境界線が存在しないのが一般的である。

自然が、人間の手によって手が加えられて農地となる。そのことは、人間の認識においても、農地が他の自然から切り離され、人間の関与できる空間、もしくは人間が管理できる空間へと意味を変えることになる。西欧近代の考え方の中では、こうした自然の不確実性を克服して、人間の管理できる空間を増やしていくことが、「発展」という概念と結びつけて考えられていた⁴⁾。

しかし、日本の自然観の中では、農業が自然からの恵みに依存しないことなど、考えられたこともなかった。農作物は自然からの贈り物であり、農業は自然と共存してうまく行なっていくことが、成功に結びつけられた。水田における稲作は、最初に山からの伏流水や小川の分け水の流入を必要とするが、日本の多くの農村では、これを田の神や山の神への信仰と結びつけて考えていた。新しい年になり、最初に水田に水を引く場合は、水の取り入れ口に田の神や山の神に対するお供え物をすると多く存在していた⁵⁾。現在でもこうした農耕儀礼を続ける集落が少なくない。山からもたらされる豊かな水が、稲作の豊穰をもたらす最も重要な要素と考えられていたのである。一方、収穫祭としての秋祭りも、豊かな稔りを手に入れたことに対する感謝であり、それは自然そのものを象徴する自然神に対する感謝として表現されていた。もちろん、日本においても農業は技術の体系として存在している。しかし、その技術の体系そのものが、天候や天災などの自然環境への依存を前提としたものであり、自然環境そのものを人間の管理下に置くという思考は、存在してこなかった。仮に、人間が自然環境を改変するとしても、それは自然環境のもたらすマイナスの影響、たとえば洪水や土壌流出、水の枯渇や減少、害虫や病気の増加等に対する、防衛的な意味としての改変が多かった。

明治期以降、近代科学技術が受け入れられると、自然そのものをも改変し、人間の支配できる自然、もしくは人間の管理できる自然という概念が農学の中から出現してくる。アメリカの農学や、ヨーロッパの農学の影響を強く受けた日本の農学もまた、自然に対して人間が支配する領域を拡大するという方向が開始され、進歩していったと考えられる。

しかし、日本農業の実際的な担い手であった大多数の農家や農民は、第二次大戦後以降も、おそらくは1960年代までは、自然そのものを完全に人間の支配下に置き、管理しようという考えは、ほとんどもっていなかったのではないかと。むしろ、土地を改良し、用排水を整備し、化学肥料を投入し、品種を改良することによって、農業の生産量を増大させ、天候の異変や風水害からの被害をできるだけ減少させることによって、自然そのものに対して全面的に依存するよりも、「科学技術」にも依拠し、農業における生産性を拡大することに努めることが重要だと考えられてきた。高度経済成長に伴う兼業化の進行は、このことをいっそう加速させた。多くの農家の人々にとって、農業は副業となり、一家の世帯主の多くは農業以

外に就業するようになった。就業先である工業や商業では、自然への依存度は農業よりもはるかに低く、自然への畏怖や信仰をもつ必要はなかった。生活を維持するための労働において、自然に対する依存度が低くなればなるほど、自然が与える豊かさや脅威に対する畏怖や信仰も、弱くなっていったと考えられる。家屋の造りも、水やエネルギーも、自然から直接獲得するのではなく、水道やガスや電気に依存し、目に見えない間接的な形態をとるようになっていった。電気冷蔵庫やクーラー、テレビ、炊飯器、自動車の普及による生活革命は、農村の生活を都市生活とまったく変わらないように変化させていくと共に、農村においても、人間の自然への依存を直接目に見えない形へと、根本的に変化させていった。

現在でも、日本各地の農村で、農耕儀礼や農耕と関連する祭りが行なわれているが、それは農業生産における、大豊作を祈念してのことではない。むしろ、大打撃を受けるような天災が起きないことに対する防御的な意味での祈念である。災害さえおきなければ、農業生産の収穫量や内容に関しては、技術的には一定の水準が達成できることが予測されている。しかし、今なお日本の農家にとっては、自然は何を引き起こすか分からない存在として認識されており、それゆえに人間が完全に自然を支配し自然の影響力を無視するというよりは、自然が予定通り平穏で確実な豊作をもたらしてくれることに対する祈願として継続していると考えの方が妥当である。

4. 人間の社会と食料の分配・消費

食料は、ただ自分が食べるだけのものではない。食料は他者に与えることもできるし、分配することもできる。ものによっては、蓄積することも可能である。人間以外の動物でも、食べ物を与えたり、分配したりする行動は観測されている。しかし他の動物では、その多くが自分の子供に対する分配や贈与である。哺乳類の中でも霊長類の場合は、この分配行動や贈与行動がより複雑になってくる⁶⁾。

人間においては、おそらく狩猟採集を中心とした生活様式がすべてであった時代から、食料の分配や贈与が行なわれていたと考えられる。

現代の狩猟採集民の研究からも、社会を構成する基本的な経済原理のうちで、贈与と分配が中心になっていると位置づけられている⁷⁾。同様の傾向は、農業を行なっている農民社会にも存在している。

農業が開始されることによって、土地と人々との結びつきは強くなった。また、自然を土地として認識し、他の自然から切り離して考えることが多くなった。しかし、土地はまだ、必ずしも私有とは結びついていない。農地で生産された食料も、すべてがそれを生産した家族や個人に帰属するとは限らない。生産された食料がどのように利用され消費されるかについては、複雑でよく考えられたそれぞれの社会のノーム（規範）が存在している。もちろん、

ノームはあくまでノームであって、実際にどのような分配がなされ、消費がなされるかについては、具体的な局面を見てみるしかないだろう。

農産物が、狩猟されたものや採集されたものと大きく異なるのは、それが蓄積されるかどうかという点にある。この点については、ゴールドン・チャイルドが最初に行なった surplus（剰余）に関する研究がある。チャイルドは採集社会から農耕社会へと移る「新石器革命」の中心的な特徴として surplus の存在が可能になったことを挙げている。ただし、近年は surplus よりもむしろ storage（蓄積）が用いられることが多い⁸⁾。

狩猟採集の場合においても蓄積は可能だと考えられる。たとえば、狩猟された野生動物の肉も、多くはその場での食料として消費されるが、一部は乾燥され、干し肉として保存され、時には交換の材料として用いられることが行なわれている。干し肉もまた、蓄積の一形態ではあるが、長期にわたって（一年以上にわたって）保存することは不可能である。一方、採集によって獲得された野生植物の根や実もまた、乾燥されて蓄積される場合がある。しかし、野生植物の場合は、乾燥し、保存される割合は極めて少ない。多くの野生植物もまた、翌年まで保存されることがない。

ところが、農業が行なわれるようになると、少なくとも一年を単位として農作物の保存を行なう必要がでてくる。もし、一年間にわたる食料の供給と保存ができなくなると、一年をサイクルとした農業で生計をたてることが不可能となり、その場合には、狩猟や採集による食料の確保が、農業による食料生産を補完する必要があったと考えられる。農業への比重が高くない状態では、そのような社会は数多く存在したであろうし、現在でもそのような社会は存在している。

農耕の開始は穀物、特に小麦や大麦の栽培化に始まるとされているが、こうした穀物は、一年という期間を超えて蓄積することが可能となった栽培植物である。これらの穀物群は種皮が硬くて小さな種子をもち長期保存が可能だという特色をもっている。農作物の蓄積が可能になることによって、農作物を直接生産する人々ばかりでなく、それ以外の多くの人々に対しても食料を供給することができるようになった。このことが余剰部分を生み出し、やがてはメソポタミアの文明を開花させることに貢献したと考えられている。

人類史の中で論じられてきた農業生産の特徴と食料分配をめぐる社会編成の特徴についての議論は、農学の中では、あまり論じられてこなかった。これは農学の研究が、農業生産の増大を中心に推進されたことと関連している。しかし、文化・社会人類学における議論や考古学における議論の中では、これらの問題は依然として重要な分析視点であり、現在でも研究が蓄積され続けている。

一方、1970年代以降、農学や農業経済学の研究が、日本国内を中心としたものから国際的な開発援助研究へと発展していく中で、農業の形態の違い、牧畜を含んだ農業様式、休閑期間を必要とする農業の存在、狩猟や採集活動との共存の問題などが、農業発展についての重要な課題として注目されるようになってくる。

なかでも、特に発展途上国が多いアフリカにおいては、商業的農業だけでなく食料供給のための農学的研究が蓄積されてくると、食料の分配やそれに関連する社会組織の研究は、農学研究にとっても必要欠くべからざる要素となってきた。なぜならば、アフリカ諸国においては、1980年代から度重なる飢餓や食料不足が発生しており、また21世紀に入った現在も、連続して起こってきている。また、地球全体を見渡すと、飢餓人口は約10億人にのぼり、現在人類が共通に対処すべき問題として、また最も優先されるべき農学の課題として世界で位置づけられているからである⁹⁾。

5. 閉鎖系接合社会における食料生産と分配

ここでは、より具体的に、小さなコミュニティと呼ばれる集団において、人々がどのように、食料を分配し、蓄積し、それによってどのような社会関係が形成されているかについて分析し、考察していく。

最初の事例として、筆者が調査したアフリカのコンゴのテンボ社会を例として取り上げる。テンボ社会は、ザイール共和国キブ州南キブ準州（ザイール共和国は、現在ではコンゴ民主共和国と名称が変更されている）に住むテンボ人によって形成されている社会である。行政的には三つのゾーン（郡）、四つのコレクティビテ（大規模行政村）に分散している。言語的にはテンボ語を話し、民族の祖とされるカテンボとそれと同行した人々の集団と認識されている。居住地域の自然環境としては、アフリカ大地溝帯の西側に位置し、高度3300メートルのカフジ山を主峰とするミトゥンバ山脈の、高度1000メートルから1800メートルにかけての山麓地帯に当たる。植生としては、高度が高いところはマウンティン・フォレストに、低いところはトロピカル・レイン・フォレストに分類される。また、テンボの人々は、森林を伐採して造成した焼畑で、キャッサバ、トウモロコシ、モロコシ、バナナなどの作物を混作栽培し食料としている。

テンボ社会では、食料は、実は二つの部分から構成されている。すなわち、商品として販売される食料と、自分たちで直接食べる食料とである。筆者はひとつのコミュニティ、具体的にはムニャンジロ村を調査分析し、何が食べる部分であり、何が販売される部分であることを明らかにした。ムニャンジロ村の食料生産では、テンボ人自身が食べるキャッサバが、同時に定期市で、テンボ人の農村から都市に向けて販売される商品作物ともなっていた。都市への人口集中が増加していく中で、ムニャンジロ村から都市プラブへ販売されるキャッサバの価格は高くなり、このことによって、焼畑農業における食料生産も増加しつつあった。しかし、ムニャンジロ村周辺では、豊富な森林が残存していたがゆえに、焼畑農地を拡大しても、農業生産自体が限界領域に達することはなかった。自分たちの食べる食料も自給でき、同時に商品としてキャッサバを販売することで現金収入を得ることが可能であった。ただし、焼

畑耕地の拡大は、やがては生態的バランスを崩す可能性があることを指摘した。

ムニャンジロ村では、労働力を商品として売買することがなかった。このことのために、入念な労働力利用のシステム(likilimba)が存在していた。そのシステムについては、筆者が、すでにいくつかの論文で指摘してきたとおりである¹⁰⁾。同様に、土地というものも、商品として販売されることがなかった。テンボ社会における土地をめぐる諸権利は、近代国家としての国、伝統的首長、リニージの長としての家長、リニージ内部での世帯の長などに、重層的な権利が認められていた。実際に、農業生産に直接関係する農地に関しては、ムニャンジロ社会では、伝統的首長とリニージの家長が実質的に管理していた。このことの詳細についても、既に論文で公表している。このように、商品として売買される食料は、限定されたものであり、しかも、食料生産に関わる土地や労働力は、商品として売買されていなかったところにムニャンジロ社会の特徴がある。

一方、ムニャンジロ社会においても、生産される食料のすべてを自分たちで食べていたわけではなかった。むしろ、量的にとらえれば、半数近くが商品として販売されていた。しかし、販売されるのは村の中ではなく、村の外側にある定期市の場であった。定期市はムニャンジロ社会にとって、空間的にも時間的にも限定されていた。同様に、テンボ社会全体にとっても、空間的にも時間的にも、限定されたものであった。

テンボ社会全体では、いくつかの定期市が存在したが、定期市の場は、定期市が開かれている限りにおいて、政治的にテンボ社会の伝統的首長の権力が及ばない場として存在していた。そこでは、テンボ社会に対して伝統的首長が本来持っている裁判権や追放権、あるいは土地に対する権利がすべて、治外法権になっていた。定期市の場は、他民族の人々が出会う場所でもあり、市場経済原理が成立する場であり、同時に都市と農村の人々や商品が出会う場所でもあった。当時のザイール共和国政府は、定期市に対するこれらのことがらを、原則的に認めていた。

ムニャンジロ社会が接触できる定期市は週2回あり、このうち土曜日はブニャキリ村で、日曜日はブランビカ村で開かれた。両者は、いずれもムニャンジロ村の外にある。また、市は土曜と日曜に限られていた。二つの市のそれぞれに対して、ムニャンジロ村から農産物が搬出される。その多くは、キャッサバ、トウモロコシ、インゲン豆、ラッカセイであった。これらは、同時にムニャンジロ社会の人々が日常的に食べていたものである。定期市に出された食料は、都市からの買い付け商人によって購入される。買い付け商人の多くはトラックをチャーターしており、道路沿いで農村から搬出されてきた農作物を現金で購入する。ムニャンジロ社会の人々は、農民として農産物を売り、それによって、現金を手に入れる。

買い付け商人は、買い取った農産物を都市(具体的には、特にブカブ市)に持っていき、そこで販売する。卸売商から小売商を経て、都市の中の小さなマルシェ(マーケット)でも売られることになる。もちろん、中央市場(グランマルシェ)でも売られており、それを買って、さらに他所の農村や町の中でも売られることになる。都市の中には食料品の蓄積倉庫も

あるが、それほど大きなものではない。一方、ブランビカ村やブニャキリ村の街道沿いの定期市となる広場のそばにも、食料貯蔵用の倉庫がある。これらの倉庫を借りて、買い付け商人は買い取ったキャッサバやトウモロコシをストックしておき、適宜都市向けトラックで運んでいく。ただし、倉庫の持ち主は、テンボ社会のメンバーであり、都市の買い付け商人ではない。したがって、このことが、農産物価格に対する紛争が生じた場合に、倉庫の保管者が、むしろ農作物を売るテンボ社会の女性農民の側に立ち、都市から来た買い付け商人と対立するということが起こる。

以上のように、ムニャンジロ社会で生産された食料は、二つのルートを通して消費されることが分かる。ひとつは、ムニャンジロ社会内部での食料としての消費であり、ひとつは、ブランビカやブニャキリの定期市に出して、都市に運ばれ、都市住民の食料として消費されることである。農産物を販売して得た現金は、同様にその多くを定期市の場によって消費されている。筆者の調査では、その収入の85%が定期市での物品の購入に充てられていた。その中には、衣料品や日用品の購入と混じって、テンボ社会では生産されていないタンガニーカ湖の乾燥魚や、牛肉、ヤシ油、米、塩なども、こうした定期市の場で購入されている。

ムニャンジロ社会では、市場そのものと結びつく場所は、時間的にも空間的にも限定されていた。市場は、週に2回開かれる定期市の場だけであったからである。一方、ムニャンジロ社会の中では、常設された店舗が存在しなかった。このことは、原則的には、ムニャンジロ社会の中で、日常的には市場的な商品売買が行なわれていないことを意味している。貨幣と商品の交換は、村の中では行なわれていない。村の中で日常的に食べられている食料は、市場的交換（market exchange）によってではなく、それ以外の方法、分配や贈与（相互贈与や互酬を含む）によって獲得している。

ムニャンジロ社会では、食物の分配が重要な意味をもっていた。人々は、その場、すなわち食事の場にいる人には、食料を分け与えるというのが原則であった。夕食時に他者の家を訪問することは、その家の人々と食事を共にすることを意味した。毎日の食事は、村人どうしの間で、質的にも量的にも、大きな差を生み出すものとはなっていない。食事の中心は、キャッサバのイモからできたウガリと、それを浸して食べるスープである。スープはヤシ油と塩とを入れ、その中にキャッサバの葉が煮込んで入れられた。もちろん、野生動物の肉や、ヤギ肉、鶏の肉などが入ることがあったが、それらは定期市の後や、結婚式、様々な儀礼の時、などに限られていた。また、定期市で買われた牛肉やタンガニーカ湖産の干魚が加えられることもあった。キャッサバのイモと葉は、自分の畑で収穫された農作物であった。インゲン豆、トウモロコシ、ヤムイモ、サトウキビなども食事の材料となったが、これらも自分の畑から収穫できるものであった。

ムニャンジロ社会では、原則としてテンボ語でグム（ngumu）とよばれる世帯を単位として食事が食べられていたが、一夫多妻の場合には、それぞれの妻を単位として食事が出された。時には、テンボ語でルフ（luhu）と呼ばれるリニージに相当する集団で食事をしたが、

その場合には男性成員が中心となって同一の食事をとり、女性たちは、それぞれのグムごとに分かれて食事をとった。さらに、農作業では共同労働の機会が多く、共同労働をした場合にも参加者全員で共通の食事がとられた。

ムニャンジロ村の社会を例にテンボ社会を見てもみると、食事の質や量には、世帯ごとによって、それほど大きな差は生じていなかった。そこには、いくつかの条件が見られた。テンボ社会では、農産物、特に主食となるキャッサバのイモや葉の収量が十分にあり、農業を行なうことができれば、主食に不自由することがなかった点である。逆にいえば、主食として食べられる以上の部分、剰余となる部分が定期市を通して、テンボ社会の外部へと流れ、それを販売することによって、現金が獲得され、現金によって外部からの商品が購入されるという構造が見られた。

市場経済化は、目に見える形で、空間的にも時間的にも限定された定期市場を通じてのみ行なわれており、市場経済の浸透はムニャンジロ社会の内部においてではなく、外側において、定期市という場を通じて、あたかも関節 (articulation)¹¹⁾ のように結びついていることが実体的に示されていた。このような社会の経済分析においては、小さな閉じた社会とその外部社会という設定を行ない、両者が定期市という場を通して接合 (articulate) されていると考えることが可能な例だと言えるだろう。

また、ムニャンジロ社会の内部では、食事は商品として売買不可能であり、食事は売買されるものではなく、分配されたり共食されるものであったと考えられる。実際、筆者自身の例のように、耕作地をもたず、農作物の収穫がない外国人が、ムニャンジロ社会の内部で食事をしようとする場合には、定期市まで出かけて材料を買って自分で料理するか、あるいは村の内部でだれかに食事を与えてもらうしかなかった。この場合、与えてもらうということは、結果的に共食をするということと同じことを意味する。ムニャンジロ社会の内部では、食料は、自分で作るか、貰うか、あるいは共食に招待されるかしか、手に入れる方法がないのである。

このことは、テンボ社会の人々にとって、食事や日々の食材となる農作物は、村の中では売り買いするものではないことを意味している。逆に、「農作物を売り買いする関係」に入るということは、隣り合う人々との社会関係の上で、「共食を共にしない関係」に入るとことを意味しており、ひいては、助けたり助けあったりする関係ではないことを意味した。

ムニャンジロ社会の内部には、定住したムズング (キングワナ語で白人やアラブ人などの外国人を意味する) は、存在したことがない。このことは、オーラルヒストリーの中でも文献上でも確認している。テンボ社会の認識の中では、ムズングは、おそらく「共食をしない関係」の人々として位置づけられることになるだろう。逆にそれらの人々は、「売り買いする関係」の人々として位置づけられ、ムニャンジロの社会関係の中では、社会成員の外部に位置づけられることを意味している。歴史的に検証すれば、ベルギーの植民地時代に、ムニャンジロ村以外の他のテンボ社会の村々には、プランテーションの支配人や宣教師として居住

していたムズングの例があった。この場合には、このプランテーションの現地支配人であるので、「労働力」として村人を雇い入れることや、収穫されたキナの樹皮を購入するために現金を支払うことも可能であった。このことは、住んでいる住居が仮にテンボ社会の内部にあったとしても、社会経済的にはこのプランテーションの支配人は、テンボ社会の外部に位置づけられていたことを意味する。もちろん、これらの外国人自身の食料は、テンボ社会の人々の食料とはまったく別のものであった。

市場経済をコミュニティ内部の経済と切り離して考えたことは、筆者が最初に研究を行ったテンボ社会の経済的、歴史的特色に由来するものであった。それは、かならずしもテンボという民族の民族的な特色や文化の問題に帰すべきものではない。むしろ、農産物の販売地である都市との距離やその輸送条件、テンボ社会の気候や土壌も含めた生態的な条件、さらに土地に対する人口の割合や土地制度、農業技術の条件が、コミュニティ内部の経済が食料を自給することを可能にし、同時に商品作物として販売することを可能にしていたのである。

したがって、都市近郊地域に位置し、これらの条件を充たすことができなかったバシ社会では、人口の急激な増加と土地の矮小化によってコミュニティ内部の食料生産の自給が不可能になっていた。その結果、農業技術としてはテンボ社会と同じ程度の焼畑農耕技術に頼っていたために、焼畑休閑の体系そのものが維持できず、食料の減産と土壌侵食（エロージョン）を繰り返した。バシ社会の内部では、栄養不足の蔓延やその結果、極端な場合には餓死さえも招いていた。

以上のように、市場経済と閉ざされたコミュニティ経済の接合という概念は、テンボ社会においてこそ成立したといえるだろう。もちろん、この概念の一般的な特徴は、アフリカの他の焼畑農耕社会にも共通に見られる社会経済構造のひとつであった。

6. おわりに

1980年代から1990年代においては、アフリカの多くの国々で、構造調整計画（SAP）が実効を伴って実施されていった時期にあたる。たとえば、ザイール共和国では、構造調整の受け入れを拒否することによって、当時のモブツ政権は経済的危機を迎え、経済的モラトリアムを実施し、さらに民主化や多党制の導入と共に、政権崩壊に至る。さらに、その後は政権交代と長い内戦の時代が続くことになった。テンボ社会もまた、それらの政治的・経済的影響を強く受け、大きく変動していった。

一方、東アフリカのタンザニアのように独自のアフリカ型社会主義を推し進めてきた国においても、1980年代から1990年代にかけては、国家財政の危機的状況を契機として市場経済が流入してきた。タンザニアでは、1986年にIMFと世界銀行の構造調整政策を受け入れ

たが、1989年から経済社会行動計画を策定し実施し始め、1991年に農作物における価格政策が撤廃され、穀物公社が解体され、穀物市場の流通の完全な自由化が開始される¹²⁾。国家という組織によって世界市場と隔離されていたタンザニアの地域社会における食料生産構造も、1991年以降は一気に変化していくことになる。実際に食料の卸売商人たちが、タンザニアの村の中にまで登場し、穀物の買い付けを行なってくる状況は、デボラ・ブライソンの先駆的な報告と詳細な記述と分析によって明らかになっており¹³⁾、それが土地の移動と利用に関して実際の農村にどのような影響を与えているかについては、筆者自身も報告している¹⁴⁾。その後のタンザニア農村の経済変動と農業生産についての分析は、杉村和彦やゴラン・ハイデンを中心としたモラル・エコノミーの研究グループ¹⁵⁾と、掛谷誠を中心とした農村開発研究グループが、それぞれ蓄積した研究を公刊し始めている¹⁶⁾。

西アフリカのカメルーンでも、構造調整計画が国家の境界を越えて市場経済が導入された。しかし、市場経済そのものが当初から農業生産に深くかかわっていた地域がある。たとえば、2000年代に入って坂梨健太が調査を行なったジャ川近郊の農村地域では、カカオ生産は独立期以前より導入されており、ファン社会では、商品作物の生産は自分達の食物を生産する焼畑農業と並行して行なわれてきた歴史をもつ¹⁷⁾。カカオ生産においては、カカオが地元住民の食料となることはない。生産されたカカオのすべてが、買い付け商人によって買いつけられて、最終的にはカメルーンの貿易港であるドアラから、ヨーロッパに向けて輸出されることになる。しかし、このカカオの販売こそがファン社会の生活の基盤をつくり上げている。

ファン社会における農業生産は、自給用の農業生産と商品作物としてのカカオ生産が共存して行なわれているという特色をもつ。ファン社会では、カカオがこの地域に導入された時点から、市場経済が地域社会の経済基盤と密接に結びついている。カカオ生産は、ファン社会の人々にとって生きていくために必要な農業であるが、カカオ生産は当初から国際市場と結びついており、国際市場の影響を直接受け続けてきた農業である。

先に分析したテンボ社会の農業と比較してみると、ファンの農業は、時間的にも空間的にも市場経済は限定されているのではなく、恒常的に市場経済が存在しており、市場経済が農業生産構造を作り上げるための重要な要件になっている社会だと考えられる。このような社会では、テンボ社会の経済構造を説明する時に筆者が用いた接合 (*articulation*) という概念そのものが有効ではないと考えられる。

しかし、市場経済の影響を強く受けているとしても、ファン社会の中の経済関係が市場経済的交換だけで成り立っているかという点、そうではない。坂梨が明らかにしたことのひとつは、ファンは隣接する狩猟採集民バカの労働力を、経済を持続させるために必要としているが、その労働力は食事、酒などの嗜好品が、現金と同様に、しかも同時並行的に有効に利用されていることである¹⁸⁾。ここでは、食事や酒やタバコが、ファン人がバカ人と社会的関係を継続させるために、重要な役割をはたしていることがわかる。

また、カカオ生産とは別に主要作物の焼畑農業によって、自分たちの食料となるキャッサバを生産している。商品生産経済と自給用食料生産経済がリンクし、結合したところに特色があり、ファン社会の基本的な経済行動を成立させてきたと考えられる。

ファンの社会の食料をめぐる社会構造を、どのようにとらえたらいいのであろうか。ファンの社会では、市場経済が基本にあるが、市場経済がこの社会のすべての経済原理となっているのではない。市場経済原理では動かない経済原理も存在しており、言い換えれば、市場経済原理とは異なる原理によって動く社会的ネットワークが存在している。ファン人がバカ人の労働力を利用する場合には、このような社会的ネットワークが有効に機能している。逆にバカ人にとっては、必要な食料(特に肉と酒)を持続的に手に入れるために、この社会的ネットワークの存在は有用である。バカ人にとっては、市場システムを直接利用するよりも、ファン人との間の社会的ネットワークを利用し、間接的に市場システムと接した方が、自分たち自身の生存経済を維持しやすいという判断が働いていると考えられる。カカオの国際市場の価格変動は激しく、それがカメルーンでのカカオ買い付け価格にも反映される。バカ人はその影響をできるだけ受けることなく、食料、酒の獲得を行なっている。一方、ファン人は国際価格の変動の影響を直接受けることを前提として、カカオの農業生産を続けている。そのことが、ファン人の生活に様々な意味で経済的に豊かになるチャンスを与えるからだと考えられる。この投機的な側面をも持った商品作物としてのカカオの生産を存続するために、バカ人との社会的ネットワークは継続して維持しされていることになる。しかしその一方で、生存維持のための食料生産は、カカオ農業とは異なる焼畑農業によって維持されている。ファン人もまた、生存経済を維持する農業を、市場経済とは別の枠組みで継続していることになる。

坂梨が報告したファン人とバカ人との間で見られる社会的ネットワークの構築は、生業様式の相違するグループ間において、それぞれの生存経済(subsistence)を維持するための方法であったと考えられる。生存経済はテンポ社会のように、市場経済と隔離され、接合されて存立する場合もあるが、ファン社会のように市場経済そのものと直接結びついて存立し、その社会の内部で生存のためのしくみを内在させている場合もあると考えられる。前者を市場経済に対する閉鎖系接合社会と呼ぶとすれば、後者は市場経済に対する開放系の社会と呼ぶことができるだろう。開放系の社会においても、市場経済原理とは異なる社会的ネットワークが存在している。1990年代以降のアフリカの農業を基盤とする諸社会は、むしろ、後者のタイプの経済構造を持った社会へと変化してきているのではないかと考える。

注

- 1) 食料人類学という学問分野については、すでにヨーロッパやアメリカでは成立している。ロンドン大学のヨハン・ポティエ (Johan Pottier) 教授は、1999年に *Anthropology of Food: The Social Dynamics*

of *Food Security* という本を公刊している。ポティエは、コンゴを中心としたアフリカにおける食料生産と分配と人々の生存の研究を通じて、社会構造とフード・セキュリティの問題を正面から取り扱った研究を蓄積しており、世界の発展途上国における食料生産と食料分配における政策的な分析と提言を行っている。

- 2) 阪本寧男、「栽培植物とは何か」山本紀夫編『ドメスティケーション—その民族生物学的研究』、および阪本寧男、『ムギの民族植物誌—フィールド調査から』、p.2-p.3。
- 3) 市川光雄『森の狩猟民—ムブティ・ピグミーの生活』。
- 4) Lucy Mair, *Anthropology and Development*, 1984, p.1-p.2.
- 5) たとえば、富山県では、「田の神迎え」や「山神祭り」といった風習が存続している。富山新聞社編『富山の習俗—ふるさとと心—』における「田の神迎え：宇奈月町」、「山神祭り：入善町」、「お鍛さま：細入村」の各項目、p.195-p.196、p.199-p.200、p.232-p.233、「正月神」と「予祝行事」に関しては、富山民俗文化研究グループ編『とやま民俗文化誌』の「正月神」の項目、p.78-p.81、さらに日本全国を視野に入れたものでは、大島暁雄・宮田登他編『民俗探訪事典』の「稲作の工程と用具」の項目における水口祭り、サオリ・サビラキ等 p.210-p.238、がその例となる。
- 6) 西田利貞『人間性はどこから来たか—サル学からのアプローチ』、p.61-p.75、および山極寿一『人類進化論—霊長類学からの展開』、p.129-p.134。
- 7) 寺島秀明「人はなぜ、平等にこだわるのか—平等・不平等の人類学的研究」寺島秀明編『平等と不平等をめぐる人類学的研究』、p.22-p.43 および、寺島秀明『平等論—霊長類と人における社会と平等性の進化』における寺島の論考。
- 8) ゴールドン・チャイルド『文明の起源（上）（下）』、岩波書店、1951。近年における surplus と storage 概念については、たとえば、Wesley Cowan and Patty Jo Watson eds., *The Origins of Agriculture: An International Perspective*, Smithsonian Institute, 1992, p.51, p.164 など。
- 9) FAO (国連食料農業機関) と WFP (国連食料計画) は、2010年9月14日に世界の飢餓人口は約9億2,500万人に達したと報告している。これは、2009年の10億230万人よりは減少しているが、依然深刻で危機的な状況であることには変わらない。FAO Media Center, 9th, September, 2010, <http://www.fao.org/news/story/en/item/45210/icode>.
- 10) Tatsuro Suehara, 'Labor Exchange System in the Tembo', *African Study Monographs*, Vol.3, p.59-p.69, 1983、および末原達郎『赤道アフリカの食糧生産』。
- 11) articulation という概念は、フランスの経済人類学者 Claude Meillassoux の *Femmes, greniers et capitaux*, Maspéro, 1975 の概念に基づく。
- 12) 構造調整によるタンザニアの全体的な変化については、末原達郎編『アフリカ経済』、世界思想社、1998。
- 13) Deborah F. Bryceson, *Liberalizing Tanzania's Food Trade*, UNRISD, 1993。
- 14) 末原達郎「市場経済化と社会変容」大林稔編『アフリカ第三の変容』、1998。
- 15) 構造調整期以降2010年までの、タンザニア経済が持っている経済の特質の独自性については、杉村和彦とゴラン・ハイデンを中心とする研究グループが、モラル・エコノミーの視点から論文を提出し続けている。以下の雑誌の特殊号および著書。Goran Hyden, Introduction, *African Studies Quarterly*, Vol.9, Issue1&2, Special Issue on Africa's Moral and Affective Economy, p.1-p.8, 2006 および *Tanzanian Journal of Population Studies and Development*, Vol.11, No.2, Special Issue, African Economy Affection, 2004、および Sam Maghimbi, Isaria N.Kimambo, Kazuhiko Sugimura eds., *Comparative Perspective on Moral Economy: Africa and Southeast Asia*, Dar es Salaam University Press, 2011.
- 16) タンザニア農村の具体的な変化と農村開発の試みについては、掛谷誠・伊谷樹一編『アフリカ地域研究と農村開発』2011において多くの報告が提示されている。
- 17) 坂梨健太「中部アフリカ熱帯雨林カカオ生産における労働力利用」木村大治・北西功一編『森棲みの社会史—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅱ』、京都大学学術出版会、p.129-p.149、2010。
- 18) 坂梨健太「カメルーン南部熱帯降雨林におけるファンの農耕と狩猟活動」『アフリカ研究』第74号、

p.37-p.50, 2009。

引用文献

- [1] Cowan, W & Watson, P. eds., *The Origins of Agriculture: An International Perspective*, Smithsonian Institute, 1992.
- [2] ゴールドドン・チャイルド『文明の起源（上）（下）』、岩波書店、東京、1951。
- [3] Hyden, G., Introduction, *African Studies Quarterly*, Vol.9, Issue1&2, Special Issue on Africa's Moral and Affective Economy, University of Florida, Gainesville, 2006.
- [4] 市川光雄『森の狩猟民—ムブティ・ピグミーの生活』、人文書院、京都、1982。
- [5] 掛谷誠・伊谷樹一編『アフリカ地域研究と農村開発』、京都大学学術出版会、京都、2011。
- [6] Mair, L., *Anthropology and Development*, Macmillan Press, London, 1984.
- [7] Maghimbi, S., Kimambo, I., & Sugimura, K. eds., *Comparative Perspective on Moral Economy: Africa and Southeast Asia*, Dar es Salaam University Press, Dar es Salaam, 2011.
- [8] 西田利貞、『人間性はどこから来たか—サル学からのアプローチ』、京都大学学術出版会、京都、2007。
- [9] 大島暁雄・宮田登他編『民俗探訪事典』、山川出版社、東京、1983。
- [10] Pottier, J., *Anthropology of Food: The Social Dynamics of Food Security*, Polity Press, Cambridge, 1999
- [11] 阪本寧男、「栽培植物とは何か」山本紀夫編『ドメスティケーション—その民族生物学的研究』、国立民族学博物館、大阪、2009。
- [12] 阪本寧男、『ムギの民族植物誌—フィールド調査から』、学会出版センター、東京、1996。
- [13] 坂梨健太「カメルーン南部熱帯降雨林におけるファンの農耕と狩猟活動」『アフリカ研究』、第74号、2009。
- [14] 坂梨健太「中部アフリカ熱帯雨林カカオ生産における労働力利用」木村大治・北西功一編『森棲みの社会史—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅱ』、京都大学学術出版会、京都、2010。
- [15] 末原達郎編『アフリカ経済』、世界思想社、京都、1998。
- [16] 末原達郎『赤道アフリカの食糧生産』、同朋舎出版、京都、1990。
- [17] *Tanzanian Journal of Population Studies and Development*, Vol.11, No.2, Special Issue, African Economy Affection, 2004.
- [18] 寺島秀明編『平等と不平等をめぐる人類学的研究』、ナカニシヤ出版、京都、2004。
- [19] 寺島秀明『平等論—霊長類と人における社会と平等性の進化』、ナカニシヤ出版、京都、2011。
- [20] 富山民俗文化研究グループ編『とやま民俗文化誌』、シー・エー・ピー、富山、1998。
- [21] 富山新聞社編『富山の習俗—ふるさとの風と心—』、桂書房、富山、1986。
- [22] 山極寿一『人類進化論—霊長類学からの展開』、裳華房、東京、2007。

(受理日 2012年1月12日)